め、相次ぐ天災地変の頻発による社会不安の深刻化は末法思想を絶対的のものたらしめたのである。此の時に於ては既に末法思想に対して疑義を挿む者は絶無であつた。斯くて末法避け難しとすれば吾等如何に處すべきか――斯かる時代的苦悩、そこに十世紀末葉からの異常な宗教的興奮が理解出来るのである。勿論日本的展開を辿つて行つた天台、眞言等も一応は問題とされるのであるが、しかし「当分は現に是れ末法なり」として現世に対する希望を捨て去つた当時の人々の心には、「厭離穢土、欣求浄土」の信仰こそ最大の魅力であつたに相違ない。かゝる時代的、思想的背景と、社会的要求のもとに急速な発展を示したものが所謂法然の浄土教である。この意味に於て鎌倉時代の佛教はすべて末法の佛教として独自な発展を辿つていつたのである。

末法時代の衆生と法然教学

伊藤信彦

一

保元の乱が保元元年におこり法然上人が丁度廿四歳の時である。廿四才の血潮にもえる青年僧としての上人はその頃永道適齢の日を續けられ都の西北嵯峨の清涼寺に七日間の求法の一事を祈請された。その後上人は南都に歩を向けられ南都の碩学を歴訪され、あたかも華厳聖にとかれし善財童子の如く熱心に求道の日日であつた。その頃はあたかも末法到来の感著しく社会の変動はめまぐるしいものであつた。保元の乱にともなう平家の抬頭の戦いそして悲しき平家の滅亡これらあわただしく変動極りなき世の中はかの「平家物語」「方丈記」「愚管抄」「吾妻鏡」「右京大夫集」に目をそゝぐ時に必ずその心境に時代相を如実に理解する事が出来るのである。法然と同時代の座主であつた慈円がその時期を次の如く語つている。

「さてもさてもこの世のかわりの継目にむまれあひて世の中の眼の前にかはりぬることをかくけざけざと見待ることこそ世にあはれにもあさましくも覚かれ」

「愚管抄巻七」と申される政治的社会的変動はまさしく人々を不安の心境にそゝぎこみ末法到来の予言をあたかも実証している如く一般人には受容された事であらう。永承七年の條に「今年始入末法」「扶桑略記」とあり人々は打ち續く戰乱と悪僧の蜂起にまさしく末法に入つたと感ぜられた事であらう。又「寄永元暦の頃の世のさわぎは夢とも幻ともあはれとも何ともすべていふべきはにもなかりしかはよろづいかなりしとだに思ひわかれず、なかなか思ひも出でしものおそ今まで

もおぼゆる。見し人々の都わかると聞きし秋づまのこと、とかくいひても思ひても心も言葉も及ばれずまことのさまは我も人もかねていつと知る人なかりしかば唯いはむ方なき夢とのみぞ近くも遠くも見聞く人皆まよはれし」（遍礼門院右京大夫集）とある如く全く不安動乱の時代相であつた。佛教に正像末の教をとくがまさしくこの時代こそ末法を思はしめるに充分なる時であつた。阿弥陀経に「於娑婆国土五濁悪世劫濁見濁煩悩濁衆生濁命濁」とある如く世はまさに五濁悪世そのもの現出であつた。

しかし上人はかくの如き変動極りなき世の中を如何に観見されたか。上人の語録や言葉の中にはその様なる動乱不安の時代相がなにも言及されていないのである。そうすれば上人はまさしくこの動乱の中に生き進みながらその時代に無関心であつたのであらうか。決してそうではない。上人はまさしくその時代の中に進みその時代をはるかに超出されているのである。そこに上人の偉大性を見出しうるのである。

二

「世のかわり目」「継目」と云はれその変動の中に生き進まれた上人はまさしくその時代に無関心であつたのであらうか、その様なる事は決してない。上人の背後には常に苦悩に悩む人間があり悲痛に暮れる凡夫があつた。直接目に映るものは戦乱や悪僧の蜂起であるけれども更にその本源的には人間の心底に基く業障そのものがあつた。それはただ平安末期と云う一時期にのみ人間が有するものではない。無始よりこの方常に具有しているものであり時代や場所をはなれ等しく人間である限り受けなくてはならないものであつた。法然上人の目に映つた有為転変の世の中はまさしく人間の煩悩、業障に基く悲しい如何ともしがたい輪廻の相と見えた事であらう。しかもその流転を超越した立場に立つたのが上人の宗教であり教学であつたのである。

現実の痛ましさが深く胸を打てば打つ程上人はそれが基く人間苦に胸を痛められその人間の内部に目をそゝぎ念佛道の南顕と云つた。上人のとらへられたのは現実の流転そのものではなくむしろかゝる現実の根源そのものであつたのである。その人間の具有する根源の煩悩は我々が如何にしてもどうする事も出来ないものである。それが取り除けなくなつたのは我々の機根が正像末となりかき下つてきたからである。その心底に具有した煩悩は正像の時代に生くる人々はそれを滅する事が可能であつたであらうけれど末法になると機根が下り如何ともなしがたいのである。それが末法と云ふのでなからうか。それで法然上人が「聖道門の修行は正像の時の教なるがゆえに上根と上智のともがらに

あらざれば証しがたし、たとへば西口の宣旨のごとし浄土門の修業は末法濁乱の時の教なるがゆえに下根下智のともがらを器とすこれ興州の宣旨のごとしかれば三時相応の宣旨これをとりたがふまじきなり大原にして聖道浄土の論談ありしに法門は半偈の論なりしかども機根くらべには源空がかちたりき、聖道門はふかしといへども時すぎぬればいまの機にかなはず、浄土門はあさきに似たれども当根にかなひやすしといひしとき、末法万年、余経悉滅、弥陀一教、利物偏増の道理にをいてゝみな信伏しきとゝ仰せられけり」（信蔵房に示されける御詞法然全集五八六頁）と記載されている如く下根下智の輩が末法に生くる人間である　唐の善導大師が「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫昿劫より已来　常に没し常に流転し出離の縁あることなし」と云われた通り人間には常に荷負された罪悪苦悩とそれにともない機の浅薄があると云へる　これも末法による人間の存そのものである生死を解脱する事が可能な時代ではない、その内に蔵している煩悩罪業を除滅する事が出来るのは正像の上根上智の人間である。

「もし智慧をもちて生死をはなるべくば源空いかでかかの聖道門をすてゝこの浄土門に赴くべきや」（勅修伝　法然上人全集附録一〇六頁）となにも生死の流転から脱する事が可能であれば浄土門の一立の必要性もない脱しやうとしても脱しきれないのでが末法に生くる人々の真の実である。果して我々の内にある悪を撥無するだけの力があるであらうか　もとより聖道門の立場にあつては自分の力によつてこの悪を超克し生死を出んとする此土得証である。　持戒や坐禅はかゝる目的を実現せんとする方法であつたけれど源空上人は自力的聖道門にたへざる自己に躓かれたのである。「しかるにわがこの身は戒行にをいて一戒をもたもつ事なし禅定において一もこれをえず入師釈して戸罗清浄ならざれば三昧現前せずといへり又凡夫の心は物にしたがひてうつりやすしたとへば猿猴の枝につたふがごとし　まことに散乱して動じやすく一心しづまりがたし無漏の正智なに、よりてかおこらんや　若し無漏の智劍なくばいかでか悪業煩悩のきづなをたゝんや、悪業の煩悩のきづなをたゝずばなんぞ生死繋縛の身を解脱することをえんやかなしきかな　かなしきかな　いかがせん　いかがせん　こゝに我等如きはすでに戒定慧の三学の器にあらず」（勅修伝　法然上人全集附録三七頁）とありてこの三学の器にあらざる人間が如何にして救済されるかと云ふ所に浄土門の必要性が勇出してくる。かくの如きく間のこの課題は自分の力をもつて解決すると云ふ事は余りにも大きすぎるのである。たゞ自分に絶望するより外はないのである。正法像法に生きた人々はこの三学の器

であつたであらうけれど末法はもう三学の器ではない。機根が下り下智となつた者こそ末法の中に苦しむ凡夫なのである。正像の世の中ではこの智劍によりて生死繋縛の身から脱するだけの上根上智であつた、末代ともなりぬればそこに煩悩にとりつかれた悪痛の人間がある。法然上人はその現実の時代が戦乱悪僧の蜂起であつたけれどそれが問題ではない。時代の苦悩はその苦悩が深かければ深い程却つて自己の業障に基く事が顕かれるのであらう。それは単なる人間の行為の善悪が問題でなく行為者（人間存在）それ自身がもつている悪そのものが問題となつてくるのである。それで御消息に「自身はこれ煩悩具足せる凡夫せと宣へり」と時代の苦しみもその根源は人間にある煩悩によるとするのである。この煩悩具足のまゝの者が法然上人の人間観であると云へよう「罪悪生死の凡夫」「十悪五逆の衆生」これが上人の目に映つた人間なのである。即ちそれで上人の教学はこの罪障を持つた人間を基盤として立脚した教学であると云へるのである。我々には一人一日の中に八億四千の念があり念々の中の所作は皆是れ三塗の業びである。一日がそうであるからまして況や長年の罪障は測り知る事が出来ない、この人間こそ末法に生き進む我々の眞課の者なのである。上人もそれで自ら「我はこれ烏帽子をきざる男なり、十悪の法然房　愚痴の法然房」（常に仰せられける御詞　法然上人全集五三〇頁）と称せられて居られる。ここに上人の人間観が見出されると共に上人一人ではない我も彼も共に十悪凡夫五逆の人間なのである。

上人の目に映る人間と云うのは常にこの煩悩にとりつかれ悪痛に沉む人間であると云へるのである。「はじめにわが身は煩悩罪悪の凡夫せ　火宅をいでず出離の縁なしと信せよ」（往生大要抄　法然上人全集七六頁）と有る如く火宅に住み出離の縁に遠切れた者が上人の観見する人間なのである。この世においてこの三煩悩を除滅する事が出来ない人こそ上人の教学を仰信せねばならぬはたして末法にこの除滅が可能であらうか。聖徳太子が十七條憲法に我必ずしも聖に非ず彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ」（憲法十條）と申されし如く末法の中に生く人間は共に凡夫なのである。この精神が法然上人の精神である事も忘れてはならない大きな事である。それで共に凡夫であり十悪五逆の衆生であり煩悩具足の凡夫なのが上人の人間観そのものであると云へよう。たゞ少数の者のみが十悪衆生でない皆共であると云ふ事になるのであらう。法然上人の如き「上人は勢至菩薩の化身なりと知れり」（黒谷上人伝十二　法然上人全集附録十五頁）と云はれ実に「其時泉光はやく意得て文殊の象とは此児を讃ならんと奇特の思をなし」（黒谷上人伝　法

法然上人全集附録四頁〕これは上人が出家して観覚得業上人から比叡山西塔北谷持法房源光上人に送られた書状であるが上人この時十二、三歳の頃である。かくの如く文殊と讃へられた上人更に「源空勢至と至現しあるいは弥陀と顕現す」〔浄土高僧和讃〕とある。かくの如く幼年より文殊と云はれ勢至と云はれ或は弥陀だと云はれた上人が「十悪の法然房　愚痴の法然房」と申される「三学の器にあらず」と云はれて居られたら誰が煩悩具足でない凡夫だ十悪でない者だと云へるであらうか。私はそう思へるのである。皆が共に十悪五逆の凡夫であり、生死流転の我々である。ただ煩悩につきまとはれたこの人間こそ末法の人間でありそこに上人の教学も展開してくるのである。その悪め積れし人間が如何にしてその生死の流転から出離する事が出来うるか。そこに上人の教学が光を放つのである。

三

上人の教学が煩悩にまとはれた人間を正客として展開してくるのである。それは少数の人間のみでない、末法に歩む人間が皆共にそうなのであるそこには当然かくの如き凡夫には戒も観法にもたへられない三学無分の人間が前提となる。

上人の教学によらずんば本当に出離不可能の我等こそ末法に歩む真の人間の幸なのである。それで「もしこのたび、むなしくすぎなば出離いづれの時をか期せん」〔三部全状、法然大全集一三〇頁〕と切実なる呼びも当然なる事である。戒については「近来の僧尼をば破戒の僧破戒の尼といふべからず、持戒破戒を制することは正法像の時なり、末法には戒なく凡六字の比丘なり」〔禅宗和語燈録三七頁〕と申される末法には戒なんてないのである。凡名号の比丘のみである。次に観法については「或る人問ていはく色想観は観経の説なり、たとひ仏名の行人なりといふともこれは観すべく候か、いかん　上人答へて給はく、源空もはじめにはさるいたづら事をしたりき　いまはしからず、但信の称名なりと」〔諸人勧化の御詞、法然上人全集五三五頁〕完全に廃捨される又仏教々義の根本たる菩提心については「浄土の人師おほしといへども真なる菩提心をすゝめて観察を正とす　たゞ善導一師のみ菩提心なくして観察を助業と判ず、当世の人善導の心によらずんばたやすく往生をうべからず」〔禅宗和語燈録二九八頁〕と無用とされている。あくまでも末法に生きる人間は前述の如き存在であるからそこに一番易き名号のみでよいと云う法然教学が末法の人間の救済される教学である。それ以外の事は何も出来ない悲しい運命に有る存在者である。その法然教学の名号たるや「一心に専ら弥陀の名号を念じて行住坐臥に時節の久近を問はず念々に捨てざるをば是れ正定の業と名

く、彼の佛の願に順ずるが故に」〔観経疏〕と示された
如く名号たるや佛の本願である「上来雖説定散両門之
益　望佛本願意在衆生一向専称弥陀佛名」〔勅修伝六、法然
上人全集附録三六頁〕と決極衆生一向弥陀佛名と称すると云
ふ事になる　その名号たるや選択本願念佛集才七章に
よれば二百一十億の佛国土を観見して選取された妙行
であると云ふのである それで全く比較に非ずと申され
弥陀佛名は絶対価値が高いのである　「末法濁乱の時の
教なるが故に下根下智のともがらを器とす」〔信巻序に示
されける御詞　法然上人全集五八六頁〕下根下智の器の我々こそ
この六字を持せねば出離期なき者となるのである　更
に「有智無智有罪無罪善人悪人持戒破戒男女三宝滅盡
の後の百歳までの衆生」〔十三問答三五七頁〕とあり一切の人
々が名号により救れる事を指示されて居られる破戒だ
悪人だ男だ女だと云ふなんら区分なくただ名号により
完全に救済され出離していくのが法然上人の根本の教
学である　我々罪業深重の凡夫はなんと云つてもこの
名号にありこれなくんば解脱なく生死を輪廻するのみ
である　その価値高き名号が元祖法然上人が弥陀の元
意に直参して弥陀の意も釈迦の意も諸佛の意もこの名
号念佛にあるのだと示された浄土一宗の開立となつたの
である。

結論

時代は末法でありその末法の中に生きる凡夫は常に
十悪五逆の衆生であり煩悩にまとわれた人間である
そして生死の流れより出離出来ない衆生こそ末法の我
々の存在である　だがしかし出離しえない者ではある
が同時に人間であるが故に出離しえられるのである
時代としての末法を又機としての罪業深重の凡夫を媒
介として如来の大慈悲が我々に加へられるのである
それは我々に対立し抵抗する末法でもなければ罪業で
もない、むしろ如来の大慈悲を伝へる末法であり罪業
であると云へるのである。
この論理こそ法然上人の力説される教学である　即ち
我々は罪業煩悩の人間である限り末法から超出出来な
いしかし又人間であるが故に超出できると云うのであ
る　この教学こそ上人の根本教学であり全体系をなす
ものと云へよう　その事は法然上人の御法語を讀むと
き常に感じる事であり此処ではそれを略するが私は何
時もそう思つて拝讀しているのである。